

問題別討論会

第1会場：「中学英語：週4時間になって変わったこと」

コーディネータ：佐久正秀（大阪信愛女学院短期大学）

提案者：樂山進（富山県上市町立上市中学校）

若林一道（三重県四日市市立富洲原中学校）

① 4技能の総合的な指導と統合的な活用について

樂山進（富山県上市町立上市中学校）

平成24年度より全面実施となった新中学校学習指導要領では、中央教育審議会の答申を踏まえ、次の基本方針に基づいて改善が図られた。

- 自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成
- 4技能の総合的な指導と統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成
- コミュニケーション支える文法指導と言語活動の一体化
- 小学校外国語活動での素地を踏まえた四つの領域のバランスのよい指導

それにともない、中学校においては各学年とも授業時数は年間105時間から140時間に増加し、指導する語数も従来の「900語程度まで」から「1200語程度」と増加している。また、従来の「...については、理解の程度にとどめること」等と定められていた、いわゆる「はどめ規定」については、記述を改め、各学校が創意工夫を生かした特色ある授業を実施できることが明確となった。

これらの実態を踏まえ、週4時間の授業で実際にどのような指導が可能となるか、いくつかのプロジェクト型学習の実践とその基になっている考えを紹介させていただきます。その在り方について、皆さんの実践や考えもお聞かせください。

② 「みんなが楽しめる英語の授業」

若林一道（三重県四日市市立富洲原中学校）

学習指導要領が見直され、指導する語数が900語程度から1200語程度に増え、授業時間数も週3時間から4時間に増えた。しかし、その変化の中でどれだけ私たち教師は、生徒たちに英語をより身近なものに感じさせ、英語を好きにさせ、英語を学びたいという気持ちにさせているだろうか。

生徒たちの学ぶ原動力は、「英語が好き」「英語を話したい」「英語を身につけたい」「英語ってカッコいい」という素直な気持ちではないでしょうか。

私たち教師のできる小さなことを積み重ねながら、「みんなが楽しめる英語の授業」を共につくっていきませんか。

第2会場：「Can Do リストで高校授業は変わるか？」

コーディネーター：米田佐紀子（北陸学院大学）

提案者：安久ゆい（富山県立富山商業高等学校）

田畑力也（石川県立金沢錦丘高等学校）

【課題について】

文部科学省は平成23年6月に「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」の中で、中・高等学校は、学習到達目標をCan Do リストの形で設定・公表するとともに、その達成状況を把握するということを発表した。

これを受けて、平成24度から各県の拠点校では英語学習到達度目標をCan Do リストの形式で設定し、action oriented な到達目標を具現化した授業を公開し、他の高校に普及することになっている。生徒にとってCan Do リスト形式の達成目標は、自分が実際に英語を使って何ができるのかを見つけることができ、自分が到達したい目標までの距離をつかむことができる、というメリットがあり、生徒の英語学習に対するモチベーションを高めるのに役立つと考えられている。

教師にとっては、「生徒にどんな英語力をつけるのか」「英語を使って～できる」という英語科共通の到達度目標を設定できるというメリットはあるものの、Can Do リストが「絵に描いた餅」になってしまうのではないかという危惧もある。何よりも大切なことはCan Do リスト設定によって、従来の知識定着型の授業がどのように変化・改善されるかということである。

本討論会では昨年度から拠点校として研究を進めている富山県および石川県の高等学校からCan Do リストの作成から運用および成果と課題を提示し討論を行う。参加者からの積極的かつ建設的なご意見をお願いしたい。

具体的には、以下の4観点を中心にそれぞれの学校での取り組みについて発表する。

- ①Can Do リストの達成目標を日々の授業の指導にどのように流し込んでいるか（流し込もうとしているか）。
- ②授業がどのように変化し成果をあげているか。
- ③どのようにすればaction oriented な授業に変わっていくか。
- ④定期テストなどはどのように変わっていくべきか。

【富山県立富山商業高等学校での取り組みについて】

平成24年に拠点校に指定され2年目を迎える。1年目は主にCan Do リストの作成と英語による授業の改善に取り組んだ。今年度は見えてきた問題点をひとつずつクリアしながら、さらなる改善に努めているところである。

本校のCan Do リスト作成の基本方針（＝英語科の目標）は、『基本的な英語を正しく使用してコミュニケーションを図ることができる。』『将来、より高度な英語力が必要となった時にも自ら学ぶことができる自立した学習者となる。』の2点である。入学時点で生徒の学力差はかなり大きく、希望する進路もさまざまな本校で、Can Do リストをどのように作成し、授業がどのように変わり生徒がどのように変わったか、またその評価方法について発表したい。

Can Do リストに則った授業のメリットとして、「生徒の顔が見えること」と「教師間の協同・協働」が挙げられる。教師の英語を理解しようと生徒たちは顔をあげて聞き、ペアワーク等で英語を使ってい

る生徒たちは笑顔である。また同じ科目を複数の教員で担当する場合、指導法について同意が得られない場合があるが、Can Do リストという共通の目標があるため同じベクトルで進むことができる。生徒は良い意味で均一の授業を受けることができる。

しかし課題も山積している。Can Do リストと授業、評価が一本の線になってはじめて効果が出ると考えられるが、結びつけるのは容易ではない。英語による授業をするには事前の準備にかなりの時間を要する。基礎力をつけつつ自己発信させるには授業時間が足りない。発信を重視すると定着しているかどうか不安になる。これらのさまざまな問題に対して今どのように考え取り組んでいるか、あわせて発表したい。

【石川県立金沢錦丘高等学校での取り組みについて】

本校は、石川県の公立校で唯一の併設型中高一貫校である。平成 24 年度文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」事業、平成 25 年度同省「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」事業の研究拠点校として、授業改善に取り組んでいる。本事業の推進にあたり、本校では、英語の授業は基本的に英語で行い、生徒が英語で自己表現活動ができるようになることを目標としている。また、本事業への取組の一環として、平成 24 年度に中学校 3 年生から高校 3 年生までの Can Do Statements(CDS)を作成した。そこで、討論会では CDS に対する本校の考え方と CDS によって授業が具体的にどのように変わったかを中心に発表する。

まず Can Do リストの達成目標を日々の授業の指導にどのように流し込んでいるかという点に関しては、本校の CDS は実生活で英語を使って何ができるようになるのかという視点から作成されたものでなく、学年ごとの学習到達目標を Can Do 形式であらわした、いわゆる教育 Can Do である。4 技能それぞれに数値目標が含まれており、現状では、生徒よりもむしろ教員側の指導指標として主に使用されている。つまり、CDS は各学年担当者がワークシートや指導法を共有するなどチームとして指導にあたる際の最終ゴールとして設定されている。各授業での様々な活動が CDS の達成に結びつくように配慮されていることが理想である。

次に、CDS によって授業がどのように変わったかというポイントに関してであるが、発表では今年度（平成 25 年度）の英語Ⅱの既習レッスンをどのように指導したかを振り返りながら説明したい。特に、今年度新たな取組として試行中である Mini Can Do リストについて発表する。このリストは、各レッスンの学習到達目標を Can Do 形式で表記したものである。生徒は、各レッスンに入る前にそのレッスンで何ができるようになればよいのかを理解し、レッスン終了時には、各自がその達成度を自己評価する。当日はこれらに加え、今後の課題も含めて発表する。